スピーキング力を高める指導とインタビューテストのあり方

1．はじめに

　2022年度より高等学校においても新学習指導要領が施行され，知識重視の教育から生徒が未来社会を切り拓くための資質・能力を確実に育成することにより一層重点が置かれるようになる。英語学習においては読む・書く・聴く・話す（やりとり・話すこと〔発表〕）の５領域を統合的に育成することが求められる。その中でそれぞれの技能を適切に評価されることが求められる。これまで，読む・聴く・書くの３技能については筆記テストの行いやすさもあり，その力を測るノウハウはある程度の蓄積がされつつあると思われる。一方で，話す力については，令和元年度の合本でも触れたように，スピーキング力の向上を意図した指導が行われているものの，スピーキング力の向上をいかに評価するのかについては学校，もしくは教員によりバラバラであるのが現状である。指導と評価の一体化が必要であるとは言うものの，実際はそこまで達成は出来ていない。

そのような想いで令和元年度はそれぞれの所属校の実情に応じて，スピーキングテストのモデル的なものを作成することを目指して実践に取り組んだ。その中でスピーキングテストに関わる様々な留意点，大切なポイントが共有され，私たち自身の学びになった。

本年度は令和元年度の取り組みをさらに発展させること，見えてきた課題を解決し，より妥当性や実行可能性が高いものに，もしくはより意味があるものにしたいと取り組んできた。どの実践も一年間試行錯誤を積み重ねながら取り組んできたものである。令和４年度からの観点別評価の本格導入に合わせて参考にしていただける部分もかなりあるのではないかと考えている。是非，参考にしていただきたい。

中学校の実践では，「正しく話す力を育てる」ことを目標に，しっかりと英語の基礎を身につけさせたい中学校段階であることを踏まえ，Accuracyに重点をおいた評価をした実践である。ただしコミュニケーションとして成立しているかどうかも規準に含めている。文法と内容のバランスを考慮しつつ，特定の指導の評価というよりも，普段の授業を通して指導してきた話す力を評価するためのスピーキングテストである。

高校の実践は二つある。一つは生徒の発話内容の分析とディベートを核にした授業デザインと評価の仕方を探った取り組みである。題材の設定や評価方法の検討，評価者の評価の揺れをなくすための工夫など，参考にできる点が多くある。単に英語を学ぶのではなく，生徒が思考をより深めるために教科横断的な取り組みを行っている点も興味深い。

もう一つは「発表する力」を育成することを目指し実践を行った取り組みである。本実践は実践校の英語科としての目標を踏まえ，また探究活動との相乗効果を狙ったものである。スキルの定着のために様々な工夫を日々の授業で積み重ね，その成果を試す場がパフォーマンステストとなっている。ディベートの実践と共に，他教科の授業をはじめとして他の教育活動と協働することの意義に改めて気づかせてくれる実践でもある。

なお，最後にGTECのスピーキングテスト編集チームにお話を伺った際の内容をまとめてある。改めてスピーキング力を測定することの難しさ，大変さを感じたが，大いに参考にできる内容なので，こちらもお目通しいただきたい。

なお，本原稿は英語研究会のホームページにワード形式でも掲載していただく予定である。ワークシートやルーブリックなど，よろしければお使いいただき，ご意見などをお寄せいただけると幸いである。

英語を「正しく話す力」を客観的に評価する

松陵中学校　百田　忠嗣

角鹿中学校　山本　由貴

1. 実践の内容とポイント

昨年度から引き続き，中学校部会では，英語を「正しく話す力」を客観的に評価するパフォーマンステストを行った。ルーブリックは，事前に生徒に提示し，質問内容を明示的にした。そうすることで，生徒が教科書の既習内容を使って「正しく」発話できることに力点をおいた。

昨年度は1，3年生を対象にパフォーマンステストを実施し，今年度は2年生を対象とした。昨年度の実践では，1年生において，誤りを訂正することなくテストを続けた生徒が多く見られたことから，今年度は生徒のエラーコレクションにも焦点を当てて実施した。自ら誤りを訂正できる生徒を育てることを意識している。

2. 実践の概要

（1） 生徒の実態

　　第1期　2年生160名

　　第2期　2年生60名

　　授業中の発言は多く，教師からの問いかけに自分の意見を素直に表現できる生徒が多い。一方で使用できる語彙については，十分に習得や活用ができていないように感じる。

（2）実践の過程

1　使用教教科書　東京書籍New Horizon English Course 2

　　2　実践を行った時期

　 　 第1期　11月上旬

　　 第2期　3月上旬

3　パフォーマンステストを行うまでのレッスンの流れ

パフォーマンステスト実施の1週間前の授業で，質問項目，評価基準，ルーブリックを配布した。その後，授業の帯活動で，ペアで練習する機会を設けるなどして準備を進めた。エラーコレクションについては，このパフォーマンステストに関わらず，年間を通して明示的かつ暗示的に指導している。

　　4 　パフォーマンステストの概要

　　　生徒は1人ずつ廊下に移動し，面接官であるALT1名が質問および評価を行った。1人あたり65秒で設定し，30人学級で1時間の授業内でテストを行った。また，レコーダーを用いて，抽出した2クラス全ての発話を記録した。

第1期の1回目は，ALTとJTEが採点を行い，採点基準の確認を行った。パフォーマンステスト実施後にも，放課後を利用して，ALTと手順や採点基準のすり合わせを行った。

　　　第2期では，テストの形式は変えず，ルーブリックを少し変更した。受験者の数は少なくなっている。昨年度と第1期に使用したルーブリックでは，自分の意見を5文で述べる問いに関して，文法的に正解か不正解かで評価した。そのため，意味は通じるものの，文法的に不正確な発話に対しては，評価されないものになっていた。そこで，文法が正確で意味も通じるものに2点，文法に誤りはあるが意味は通じるものに1点，というように段階的に得点を与えた。

|  |
| --- |
| 実施時期　：　第1期11月　　第2期3月 |
| 評価内容　： ①正確性・発話量　【計13点満点（第1期）18点満点（第2期）】・　既習文法事項を用いた質問　　4点×2　・　個人的な質問（2年生の文法を使用）　　5点（第1期）　　10点（第2期）②コミュニケーション　【計4点満点】・アイコンタクトの有無　1点・聞こえる声量　1点・英語を話すスピード　1点・友好的な態度（笑顔や相づちなど）　1点　　　 |
| ルーブリック　：1　Wh-Questionに関するもの　2　Wh-Questionに関するもの3　Personal Questionに関するもの 4　その他（非言語コミュニケーション）に関するもの　　　【資料2】参照 |

5　このパフォーマンステストのポイントとなる点

①質問項目について【資料1，2参照】

＜第1期＞

昨年度実施したテストでは，事前に配布したものと同じ質問項目を当日も使用したが，今年度はWh-questionに関しては，テスト当日に問いの一部を変更した。具体的には，What will you do if you have one million yen?の質問の下線部をthree / five thousand yenに変え，What will you do this weekend?の質問の下線部をtonightに変えた。今年度は2年生を対象としたため，即興で話すことを求めることで1年生よりも難易度を少し上げることを目的とした。

＜第2期＞

第2期では，事前に提示した質問と全く同じものを尋ねた。第1期では質問項目の一部を変更したことで，多少戸惑った生徒もいた。そこで，第2期では質問を変えずに行った。

②ルーブリックについて【資料3，5参照】

第1期では，Personal Question を5点満点。 第2期では，Personal Questionを10点満点とした。

【資料1】第1期で使用した質問項目

Interview Test Questions

**1 Wh –Questions**（ここから２問 テスト当日は少し変更します）

1 What will you do if you have one million yen?

2 What 　　 do you like and why?

□にはsad やangry, happyが入る

3 What do you do when you are 　　 ?

4 What do you have to do every day?

5 What will you do this weekend?

\*２文以上答えられるようにしよう

**2　Personal Questions** ５文で

1What are you interested in?

2 What do you want to be?

 \*ここは５文覚えよう。

【資料2】第2期で使用した質問項目

Interview Test Questions

**1 Wh –Questions**

\*２文以上答えられるようにしよう

1 What is the most important?

□は当日のお楽しみ

2 Which do you like better, 　　 or 　　 ?

3 What are you proud of?

4 What will you decide to do this year?

**2　Personal Questions** ５文で

1Tell me about your town　（町紹介）

2 Tell me about your favorite things (好きなもの紹介)

 \*ここは５文覚えよう。

【資料3-1】第1期で使用した評価基準

2年生　Interview Test Explanation

|  |
| --- |
| **Ｗh-question** 4 3 2 1 0 |
| **4** | Give the correct answer.Make almost no mistakes. (0~1)Use more advanced words and grammar.Say more than two sentences. Good speed.　　　正確な文２文以上。 | Q: What subject do you like?A: I like science. It is difficult so I study it every day. My science teacher is Mr. Makino. He is cool.  |
| **3** | Give the correct answer.Make some mistakes. (2~)Say two or more sentences. 少し誤りがあっても正確な文が２文以上。 | Q: What subject do you like?A: Science is. I like science. It is interesting. |
| **2** | Give the wrong answer, but correct it.Say a short answer.誤った答えでも正しく言い直すことができる。正しい1文のみ。 | Q: What subject do you like?A: Soccer. Oh, science. I like science. Fun. |
| **1** | Give the wrong answer.Don’t make corrections.問いに対して答えが不正確。誤りを訂正できない。 | Q: What subject do you like?A: Oranges are. |
| **0** | Give no answer.  |  |

|  |  |
| --- | --- |
| **Personal Question** | 5 4 3 2 1 |
| **5** | Give 5 correct answers.Make almost no mistakes.Use a variety of words and grammar.正しい文が5文。 | Q: Tell me your friend or family member.A: Tomoki is my father. He is an English teacher. He likes sweets. He often eats cakes. His favorite shop is C'est La Vie! |
| **4** | Give 4 correct answers.正しい文が4文。 | Q: Tell me your friend or family member.A: Tomoki is my father. He is an English teacher. He likes sweets. He plays soccer. |
| **3** | Give 3 correct answers.正しい文が3文。 | Q: Tell me your friend or family member.A: Tomoki is my father. He is an English teacher. He likes sweets. |
| **2** | Give 2 correct answers.正しい文が2文。 | Q: Tell me your friend or family member.A: Tomoki is my father. He is an English teacher. |
| **1** | Give no answer or the wrong answer.One correct answer. 無回答か正しい文は1文のみ。 | Q: Tell me your friend or family member.A: Tomoki. |

【資料3-2】評価シート

|  |
| --- |
| **Other (1 point each)** |
| **Eye Contact** | Yes No |
| **Loud Voice** | Yes No |
| **Good Speed** | Yes No |
| **Friendly Attitude** | Yes No |
| **TOTAL** | / 4 |

|  |
| --- |
| **OVERALL TOTAL** |
| **Wh- Question 1** | 4 3 2 1  |
| **Wh- Question 2** | 4 3 2 1  |
| **Personal Question** | 5 4 3 2 1 |
| **TOTAL** | / 13 |

【資料4】インタビューの前に生徒に配付したTips集

**Interview Tips:**

No mask

Smile

Practice

Gesture



If you don’t understand, ask again…and again….and again.

* Pardon me?
* Can you say it again, please?
* One more time, please.
* Excuse me, could you say it more slowly / loudly?

Be like Dory.

【資料5】

第2期で使用したルーブリック

○Wh-questionについては，第1期と同じ物を使用。

○Personal questionは以下の通り。

第1期では5段階評価だったところを，第2期では3段階評価に変更した。

|  |
| --- |
| **personal question** 2 1 0 |
| 2 | Give the correct answer.　 Use more advanced words and grammar.Make almost no mistakes. 　Give the wrong answer, but correct it.正確な１文。　誤った答えでも正しく言い直すことができる。 |
| 1 | Give the wrong answer but can understand the content.Don’t make corrections.意味が通じるものの，文に誤りがあり，その誤りを訂正できない。 |
| 0 | Give no answer.  |

○その他の部分についても，第1期と同じルーブリックを使用した。

[第2期で使用したルーブリック集計表]

Speaking Test Evaluation Sheet

|  |  |
| --- | --- |
| Wh－Question ２文の質問 | Number： |
| ４ | ３ | ２ | １ | ０ |
| Notes： |

|  |  |
| --- | --- |
| Wh－Question ２文の質問 | Number： |
| ４ | ３ | ２ | １ | ０ |
| Notes： |

|  |  |
| --- | --- |
|  | Personal Question ５文のスピーチ |
| Sentence | Points |  |  | Notes |
| １． | ２ | １ | ０ |  |
| ２． | ２ | １ | ０ |  |
| ３． | ２ | １ | ０ |  |
| ４． | ２ | １ | ０ |  |
| ５． | ２ | １ | ０ |  |
| Total |  |  |

|  |
| --- |
| Other (1 point each) |
| Eye Contact | Yes　 　No |
| Loud Voice | Yes No |
| Good Speed | Yes No |
| Friendly Attitude | Yes No |
| TOTAL | / 4 |

6 　生徒の反応

【第1期】

　　・定期考査に関連する質問項目を設定したことで，モチベーション高く取り組めた生徒がいた。

・緊張した様子の生徒が多く，時間が足りないという感想を多く聞いた。

・緊張からか，普段の授業では複文で答えることができるのに，当日は複文を産出できない生徒がいた。

　　【第2期】

　　・2回目ということで，生徒が慣れていたように感じた。テストはスムーズに行われた。

 ・質問項目が直前の定期考査に関連したものだったこともあり，自信をもって取り組めた生徒が多かった。

・準備の時間も第1期より少なかったが，ペア活動の際に，文の産出に困難を感じている生徒は少なかった。

　　・文法の正確性に関しても，ミスは少なかった。

　　・2文以上もしくは，5文をなんとか産出しようとする生徒が増えた。

7 　成果と課題

　　（成果）

・定期考査前に実施したことで，生徒の理解度が把握でき，苦手な文法項目についてフィードバックを与えることができた。今回，目標の1つとしていたエラーコレクションは，クラスによってばらつきはあるものの，習熟度が高い生徒を中心に何例か見られた。

例1: T: What will you do tomorrow?

 S: I study. I will study English. It is difficult.

例2: T: What are you proud of?

 S: I proud of あっ I’m proud of my mother.

例3: S: I like watch あっ違う I like to watch youtube.

例4: S: He is lives in Tsuruga. 　He lives in Tsuruga.

・第1期と第2期で産出された文数を比較すると，抽出した2クラスではどちらのクラスも第2期の方が多くの文を産出できていた。また，クラスの生徒の約半数が文数を増やすことができた。

クラスA： 第1期　クラス産出総文数122文

 　　　 第2期　クラス産出総分数179文

クラスB： 第1期　クラス産出総分数183文

 第2期　クラス産出総分数213文

　（課題）

　概ね，時間内にテストを終えることができたものの，やはりALTの負担は大きかった。採点に関しては，第1期，第2期と回数を重ねることで精度が上がってきたように思う。しかし，多少のばらつきが見られるのが現状である。ルーブリックの改訂をしながら今後も継続して取り組んでいきたい。

エラーコレクションについては，習熟度が高い生徒において，何例か見てとることができた。こちらも，第1期のときよりも，第2期の方が多く見られた。しかし，習熟度が低い生徒に関しては，第1期，第2期を問わずエラーコレクションはあまりみられなかった。

（委員会で出された意見）

　　○ルーブリックについて，Wh-questionの採点をもっと簡略化すると良い。（2，1，0の３段階にする）英語の正確さを把握する上では，そうすることで，採点の負担も減るのではないか。

　　○アイコンタクトやスピードなどの「その他」の項目は必要であるか。60秒の中で評価できるのか。

　　○自分の変容を生徒自身が見られるようにするため，テストを録音して聞けるとよい。

　　○第1期と第2期のルーブリックがほぼ同じ形式であったことが良かった。

　　　同じものを使うことで，評価項目の妥当性を検証することができる。

（3）実践を終えて

パフォーマンステストを複数回行うことで，生徒の成長を感じることができた。第1期と第2期の産出文数を比較すると，明らかな伸びが見られる。第1期と第2期で同じ問いを使用しているわけではないので，問いの難易度も関係してくると思うが，パフォーマンステストや意見や考え問う活動を継続していくことで，生徒の産出文数を増やすことができると考えられる。また，教師自身の指導を振り返ることができ，担当クラスの弱点も把握することができた。ただ，今回のパフォーマンステストは時間の余裕がなかったので，一人ひとりにもう少し時間をかけることができればよかったと感じている。一方で，評価の難しさも再確認した。1分の中ですべてを評価する必要があり，I’m proud of ….なのかI proud of … . なのかALTでも聞きとりにくいことがあった。第2期は評価基準を一部変更し，2文で答える問いは4点満点で採点したが，採点者にとっては1文を2点に換算すると採点がしやすかった。

来年度は，中学校にも1人1台タブレットが導入されるので，タブレットを用いて各々が自分の発話を録音できれば，自分の変容を見て取ることができるだろう。そうすれば，フィードバックもさらに意味を成してくると考える。年間を通してパフォーマンステストを蓄積し，それを振り返ることで１年間の成長が感じられるのではないだろうか。今後もパフォーマンステストのデータを蓄積し，評価項目の妥当性を検証しながら実践を続けていきたい。

生徒同士のやりとりを正しく評価するために

福井県立藤島高校　三仙真也

スピーキング力を育成する，この目標を達成することは容易ではない。

異なるクラスの授業者とコンセンサスを得たり，授業のどのような活動でその力を得るかを考えたりすることにそもそも苦労する。また，それだけでなく「スピーキング力」自体が何を意味するのか（話す「だけ」で良いのか，内容を吟味する必要があるのか，そうであればどのような内容を話すことが高い「スピーキング力」を意味するのか　等々），「育成する」ことが最終的にどのような状態を目指すものなのか（語彙，語数，そもそも正しく評価する方法とは　等々），など授業者によって規準が分かれることは，授業方法だけでなく，最終的な目標を失って教員全体が独自のやり方に終始する結果も招きかねない。

授業の中でスピーキング活動を入れない教員は昨今少なくなっているが，「活動あって学びなし」のような，何を目標にしているのか分からない授業や，教師の説明をただ座って聞いているほうが能動的な学び（頭の中で）につながる授業さえある。生徒が生き生きと活動する中で，学びや活動によって得られる力を保証しながら年間を通じて授業を構成することが，私たち英語科教員の責任である。

1. 実践の内容とポイント

本年度のTEFL委員会のテーマである『スピーキング力の育成と評価のあり方』について，本実践では昨年度からさらに研究を深め，①生徒の発話内容の分析（生徒同士のやりとりの分析）と②ディベートを核にした授業デザインと評価の仕方について研究を行った。

①生徒の発話内容の分析（生徒同士のやりとりの分析）（2020年度上半期）

昨年度のTEFL委員会の研究をベースに，生徒同士にインタビューテストを実施し，教科書の内容をベースにinformation gapを埋める活動を行った。単調な，ただ必要な情報を聞き合う活動にならないよう，時間設定やワークシートの設定に苦労しただけでなく，特にこの実践で課題となったのは「評価する側に，生徒の発話の種類や評価にゆれが生じること」であった。この点を踏まえ，生徒同士のやりとりの設定と評価に限界があることを再度認識し，②につながる「題材の設定」「評価方法の吟味」「評価者の評価の均一化」をふまえた実践を行うこととなった。

②ディベートを核にした授業デザインと評価の仕方の研究（2020年度下半期）

上半期の実践をふまえ，スピーキング力を育成し，正しく評価するうえでは「題材の設定」「評価方法の吟味」「評価者の評価の均一化」が重要であると考えた。この点をふまえ，１）題材には「合教科的視点（現代社会や生物基礎といった科目」を取り入れること，２）評価方法は生徒の立場や意見に応じてmatter/mannerの両面からルーブリックにもとづいて行うこと，３）評価の均一化のために，教員の発言をある程度スクリプト化しておくこと，を工夫した。Team Teachingの授業を有効活用し，ディベートを学びながら教科横断的にテーマ設定をし，評価項目の事前提示やパフォーマンステスト実施からの適切な波及効果が得られるようにした。

2. 実践の概要

　(1) 生徒の実態

　藤島高校１年生

授業中の発言は多く，知的好奇心の高い生徒も多い。１年生ということでまだ知識に乏しい生徒が一部いる一方，コロナ感染予防のための休校措置の影響もあって学力差は例年と比べ比較的大きいように感じられる。

＜①生徒の発話内容の分析（生徒同士のやりとりの分析）（2020年度上半期）＞

 （2）実践の過程

1（使用教材）　　Revised Element English Communication Ⅰ　（啓林館）

　　　　　　　　　　　　　　　Lesson 4 ‘‘Twice Bombed, Twice Survived’’

 2009年に初めて公式に「二重被爆者」として認定を受け，広島・長崎での被爆経験や息子を失った経験をもとに，戦争の惨禍を二度と繰り返さないように活動を続けた山口彊氏の文章である。国連本部でのスピーチや原爆に関する若者の認識不足を非難した英文などを用いて，「自分の人生にとって契機となった瞬間」や「世界平和をどのように実現するか」などを高校生の目線で表現できるようになることをねらいとしている。

　2（実践を行った時期）　　 １学期

3（パフォーマンステストを行うまでのレッスンの流れ）

　Q&A活動を中心としたレッスンの内容理解はもちろんのこと，Pre-Reading活動としてThink of the most shocking or the happiest day of your life. What happened on that day? Why do you think it was shocking or impressive?に答える活動，Post-Reading活動としてWe cannot tell when we will die or how long we will live. But if we knew, what would you do on the final day of your life?の問いに答えたり，意見を書いたりする活動を行っている。

　4 （パフォーマンステストの概要）

最終的なパフォーマンステストとして，山口彊氏が二重被爆の体験や息子を原爆関連症で失った経験を転機とし，戦争を起こさないための活動に従事し始めた経験をふまえ，生徒にとっての「人生における転機」について２人１組となり，インタビュー形式で伝え合う活動を行った。

5（このパフォーマンステストのポイントとなる点）

　昨年度のTEFL委員会の研究報告をベースに以下のメモを簡単に記入させ，インタビュー活動で聞き出す活動を実施した。当然「いつ」「何」等の疑問詞を用いて聞き合うことが予想されるが，相づちやその他のポイントについても聞くように氏，会話が単発にならないよう，また聞いた答えに対して感想や反応を示したり，さらに聞いてみたいことを聞いたりさせるなど工夫した。

 自分の人生の転機を伝えよう

１．いつその転機が訪れたか

２．実際に何が起きたか

　　　　　　　　　　                               　　　　（変化前の自分）

　　　　                                  　　　　　（どんなことが起きたか）

　　　　　　　　　　                             　　　（どう変わったのか）

6 （生徒の反応）

いくつかテストを録音し，分析した。そのうちのひとつ，インタビューテストでの生徒A・Bの対話は以下の通りであった。文法的に誤りが含まれる場合があるが，概ね生徒の発話通りである。なおAがInterviewerを，BがIntervieweeを務めている。

A: So…When did your turning point happen?

B: When I was a junior high school student, I joined the brass band club.

A: What happened in your team? What was changed?

B: Before when I joined the brass band club, I was interested in only percussion and piano.

A: What changed?

B: I wanted to be interested in more instruments. I became interested in clarinet, trumpet, and trombone.

A: When did you start piano?

B: I have been playing piano since I was 6 years old

A: What was the best, happiest memory about piano?

B: My best memory about piano is winning the contest.

A: So you said you did the brass band club, what was your instrument?

B: At first I played the trumpet, but the second instrument was trombone, and now I play the ‘fagotto’.

A: Why did you change the instrument?

B: Because at first I can’t play the trumpet but I wanted to try to play it at first. The second reason is that the brass band teacher told me to play it.

A: Do you like the ‘fagotto’?

B: Yes

A: Why?

B: Because… the sound is… very wonderful, and very cute.

(以下省略)

7 （成果と課題）

　（成果）

成果として考えられる点は以下のである。

・教科書等の題材をベースに自分の変化について述べる活動であったが，題材に対する自己関与度（relevance）の低い本レッスンにあっても「自分ごと」としてとらえ，中には「山口氏のように・・・」のように題材に言及しながら自分の考えを述べるなど発展的な発言をする生徒がみられた。

・ワークシートの情報のみを聞き出す活動にせず，積極的に相手が考えるより深い思いや経験まで聞き出そうとする姿勢がみられた。

（課題）

課題としては，以下の点が考えられる。

・下線を引いた部分が追加の質問（ワークシート上は表記する部分のない質問）であったが，Yes/No questionやシンプルなWh Questionに終始し，Interviewer自身の考えを述べながら相手の考えを引き出したり，双方向のやりとりから深い議論には至らなかった。

・即興であるがゆえInterviewerの発問の分析を行ったり，発問内容をもとに正しく評価することが難しい。またパートナーの表現力に左右されることが懸念され，適切なパフォーマンステストとして成立するかは疑問の余地がある。

・昨年度のTEFL委員会の研究に基づき，当初発問の種類を分類し，どんな種類の発問（Display Question/ Inferential Question/ Open-end Question など）をしたかに基づいて採点する形式をとろうとしたが，区別が難しく，また妥当性の部分でも疑問であった。

以上のことをふまえ，TEFL委員会では発問の形式を分類することによる生徒同士のやりとりを評価することの妥当性はかなり低いと結論づけた。教師対生徒のフォーマットのなかで，負担の偏りのない持続可能なかたちで，かつ生徒が能動的に活動する波及効果の得られるパフォーマンステストこそ，適切な評価のありかたであると考えた。

＜②ディベートを核にした授業デザインと評価の仕方の研究（2020年度下半期）＞

1（使用教材）　　　　独自教材

　2（実践を行った時期）　　 ２学期～３学期

3（パフォーマンステストを行うまでのレッスンの流れ）

　①　＜トライアングルディベート＞

　ねらい

・ディベートのフォーマットを生かしながら，肯定・否定側の両方を経験させることで，論題に対する理解と思考力を深めさせる

・即興で相手の意見を要約し，自らの立場や考えに基づいて論理的な表現ができるようにする

　生物の授業で「遺伝子配列・ゲノム編集」について学んでいることからdesigner’s babyに関する論題“We should change children’s genes before they are born.” を設定した。表現力の育成に重きを置く活動ではあるが，題材に対して自分の知識を組み込めるよう，論題の設定において他教科の視点を取り入れることは非常に有益である。



（当日のパワーポイントから）

②＜ペアディベート＞

　ねらい

・ディベートの形式を使って，肯定・否定側の両方の立場を経験させ，論題についての理解を深めることはもちろんのこと，アタック・ディフェンスについての学習と実践を通じて多角的なものの考え方ができるようにする

・パフォーマンステストにむけて，評価形式をあらかじめ示すことで，生徒に体得してほしい表現形式やスピーチの行いかたを理解させる

以下のフォーマットでペアディベートを行った。

|  |  |
| --- | --- |
| Student A (AGREE) | Student B (DISAGREE) |
| **Opinion Speech 1:00** | **Opinion Speech 1:00** |
| *Thinking Time 30sec* | *Thinking Time 30sec* |
| **Attack Speech 1:00** | **Attack Speech 1:00** |
| *Thinking Time 30sec*  | *Thinking Time 30sec* |
| **Defense Speech 1:00** | **Defense Speech 1:00** |

　なお論題については情報の授業で学習した内容と関連させ，"We should stop high school students

from using SNS."とした。この論題はパフォーマンステストでも使用することをこの段階で生徒に伝えた。この論題についても他教科での生徒の学習内容とすりあわせ，「合教科的視点」を常に取り入れるよう心がけた。

　4 （パフォーマンステストの概要）

|  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- |
|  | **2** | **1** | **0** |
| **Speaking Style** | Loud voiceGood eye contactEasy to understand | Missing 1  | Missing more than 1 |
|  | **4** | **3** | **2** | **1** |
| **Opinion Speech** | * Contains all parts of the speech (①Opinion, ②reason,

③example, ④explain, ⑤conclusion)* Explanation is good
 | * Missing 1 part of the speech, OR
* Explanation is OK
 | * Missing 1 part AND Explanation is mostly OK
 | * Missing more than 1 part, OR
* Explanation needs to be improved
 |
| **Defense Speech** | * Contains all parts of the speech (①Summary, ②“but”, ③explanation, ④conclusion)
* Explanation is good and connects to opinion speech ideas
 | * Missing 1 part of the speech, OR
* Explanation is OK
* Ideas are mostly connected to opinion speech ideas
 | * Missing more than 1 part OR
* Explanation is OK
* AND Ideas are not so connected to the opinion speech
 | * Missing more than 1 part, AND/OR
* Explanation is unclear or unconnected to the opinion speech at all
 |

上記ルーブリックを事前に配布し，実践①生徒の発話内容の分析（生徒同士のやりとりの分析）（2020年度上半期）での反省を生かし，１）教師対生徒でのインタビュー形式を採用し，２）題材における自己関与度を高める工夫（トピックの設定など）を行い，３）適切な波及効果を与えるための評価形式の事前提示を行った。肯定側・否定側のいずれに立つかは当日指示するものとした。つまり，Opinion Speechはある程度準備できたとしても，それに対してどのようなアタックがくるかは予想できず，その後のディフェンスについてはほぼ完全に即興で対応することが求められた。

5（このパフォーマンステストのポイントとなる点）

実践①で問題となった「教員間の評価のずれ」を是正するために，上記のルーブリックを使用することはもとより，教員からのアタックもある程度スクリプトを準備した。アタックの方法もディフェンスで行ってほしいスピーチ形式（相手の意見の要約・反論の根拠・理由の明示）等を踏襲し，アタック自体が生徒にとって望ましい表現形式となるようにした。

以下が教員間で共有したアタックシート（抜粋）である。

Attack pattern for teachers:

You said:

But that’s: not true / not always true / not important / not relevant / the opposite

Because:

Example attacks: *These are based on common reasons heard in class*

Attack to AGREE speeches

1. You said that social media is dangerous because people do crimes,
but that’s not always true,
Because at school, students can learn about how to be safe when using social media. Therefore, we can use social media safely.
2. You said that people can become addicted to social media,
but that’s not important,
because there are worse things to become addicted to, for example drugs. So, social media is not so bad.
3. You said we need time to study so we shouldn’t use social media,
but that’s the opposite.
If we have some trouble with our school work, we can use social media to find the answer quickly. So, if we use social media, we can study faster.

Attack to DISAGREE speeches

1. You said that social media is convenient to communicate,
but that’s the opposite.
We can’t understand a person’s true feelings on social media. It is better to talk to them in person to communicate clearly. Therefore, we don’t need social media.
2. You said that we can get a lot of information from social media,
but that’s not always true.
Because anyone can put information on social media, sometimes the information is wrong or fake. So, we should not use social media.
3. You said that important to talk to friends,
but that’s not always true
because we can talk to our friends in other ways. For example, we can talk during club activities or between our classes. We don’t need social media to talk.

6 （生徒の反応）

A: I agree with this topic because high school students tend to use social media every day for a long time, so I think they lose enough time to study, play with friends and sleep. For example, a study showed that Japanese high school students’ sleeping time is decreasing now, and I think it is because of using the time to use Social media. Using social media is good for them, but time for studying, playing with friends, and sleeping and time to study is much more important. So I think we should stop high school students from using Social Media.

B: OK, I’ll make some attack speech. First of all you said we will lose time to study, but you said if we use SNS, we can communicate with our friends, and even when we can’t get the correct answer, we can ask questions to our friends via Social Media, so we can use time more efficiently by using Social Media. Second of all, you said the time to sleep and study is more important, but if we put more emphasis on sleeping, we will lose time to study. And if we keep the time to study, we will lose the time to sleep. So what you said has some contradiction.

( preparation)

A: You said that studying with Social Media is more useful for students, but it’s not always true because we can ask questions to teachers more easily than SNS because if we use SNS, that is only sending some text to them. And you said there is some contradiction, but I’m only saying three different things, studying, sleeping, and using SNS can’t be done at the same time.　Therefore, what you said is not true.

7 （成果と課題）

　（成果）

　・教員間の連携と評価方法のすりあわせは有機的に行うことができた。

　　アタックシートの共有と協力してルーブリックを作成することにより，教員同士の指導観のすりあわせだけでなく，ずれの少ない評価方法にすることができた。

　・適切な波及効果がみられた

　　生徒がモデルとなるアタックスピーチを聞いてディフェンスを行うことができ，模範的なディフェンススピーチを行うことができた。特に下線部において評価が高く，生徒自身がルーブリックを参照して適切な発言ができていることがうかがえる。

　・教科をまたいだ論題設定にすることで，他教科に対しても能動的に学ぼうとする姿勢がみられた。

（課題）

・生徒がOpinion Speechについては準備することができた

パフォーマンステストの冒頭で論題を提示するのではなく，ある程度の準備時間を生徒に持たせてしまう結果となった。またパフォーマンステスト自体にやや時間がかかったため，時間の最初に評価した生徒と最後に評価した生徒では不公平となってしまった。これについては生徒へのアナウンスのタイミングをずらすことで対応できるかもしれないが，テスト自体が煩雑となってしまう懸念もある。

　・（３）年間の指導の中の位置づけが不明確

TTの授業ということもあり，Can-Do Statementと紐付けながらディベートを実施しているとはいえ，それでも週１回の授業のなかでやりくりする必要があり，単発となった感は否めない。

（3）実践を終えて

 スピーキング力を育成する，この目標を達成することは容易ではない，と書いたが，評価を適切に行うことはそれ以上に難しいと感じる。各教員のなかで指導をすりあわせ，かつ適切に波及効果を与えることはなかなか難しいのが実情である。

なかでも「やりとり」をどのように評価するかはCEF-RにおいてInteractionの項目がSpeakingにおいてPresentationと分かれていることからも評価するうえで重要な観点である一方，難しさを感じる結果となった。実践①で事実上断念した「生徒同士のやりとりを促し，適切に評価する」ことについては，もう一度，学習者の学習到達度，発問，題材，ルーブリック等を検討し，引き続き研究する必要があると感じる。

上記②の実践では，あえてある程度のフォーマットを授業担当者間で揃え，シラバスベースで実施することができれば，効果的にパフォーマンステストが実施できることの可能性は示すことができたと感じる。今後より省察を重ね，より適切な評価のあり方について検討していきたい。

発表する力を育むパフォーマンステスト

福井県立若狭高等学校　本田　涼哉

1. 実践の内容とポイント

　　令和２年度若狭高校第一学年の英語科では，「自信を持って英語を使用できる生徒」の育成を目標にスピーキングのパフォーマンステストを年間３回実施した。１学期はプレゼンテーション，２学期はディベート，３学期はアカデミックプレゼンテーションを行い，生徒の「発表する力」に焦点を当て，実践を重ねた。

本稿では１学期に行ったプレゼンテーションのパフォーマンステストの実践について報告する。「自信を持って英語を使用できる生徒」，「聞き手を意識しながら発表できる生徒」を目標に「コロナウィルス終息後に福井に海外からの観光客を呼び込む」という場面設定の元，「福井県を楽しむツアーを考え発表する」という題材のパフォーマンステストを実施した。

本校，福井県立若狭高等学校では，学校設定科目「探究」で生徒が地域資源を題材に探究学習を行うというカリキュラムが特色である。生徒は，地域課題解決に向けて，調査・研究を重ね，年度末に研究成果を発表する。本実践では，パフォーマンステストで扱った題材が「探究」での研究活動を促進することを狙って，「福井県」という地域に着目した題材を選定した。２つの学習活動において共有された目標に対して，それぞれが相互作用し合うことを狙った。

2. 実践の概要

　(1) 生徒の実態

　　第一学年（普通科・文理探究科）に対して実施した。本校では，普通科，海洋科，探究科の３学科の生徒が一つの校舎で学んでいる。故に，１学年に複数の学力層が混在している。普通科の一部の生徒には英語を話すことに不安を持っている生徒もいるが，探究科には英語を話すことに対する抵抗が低い生徒が比較的多い。普通科の中には英語を使うことに抵抗があり，定期テストで高得点をとることは苦しいが，洋楽や洋画が好きという生徒も一定数いる。学年全体を見ると，英語に対する興味・関心が高い生徒が比較的多い。

 （2）実践の過程

　　1（実践を行った時期，実施科目，使用教科書）

　 　７月（１学期末），コミュニケーション英語Ⅰ

2 テーマ設定理由

本校では，学校独自の科目として，「探究」という授業を生徒が受講する。探究学習を通じて，生徒は研究における「課題設定能力」を高める。そのカリキュラムの中で，一年生は地域資源（地元食材，観光地，環境など）を土台にして課題を設定し，探究活動を行う。このような背景を踏まえ，調査した内容に通ずる「福井県」というテーマは生徒にとって取り組みやすいものではないかと考えた。また，三年次に探究学習の成果を英語で発表することも踏まえると，探究学習の観点からも生徒をサポートする活動として適していると推測し，「福井県を楽しむツアーを発表する」というコンセプトを立案した。

さらに，福井県全体，特に若狭地域では，人口減少が加速しており，人口流出を食い止めるという現実的な課題に直面している。一方，福井県は日本の伝統的な文化遺産や日本らしさを感じられる風景が楽しめるという特徴を持つ。これらの事実を基に，海外からの観光客を呼び込むツアーを考えることは社会的な課題解決に取り組んでいくことであると意味付けができると考えられる。

3 （パフォーマンステストの内容と評価基準）

　本実践では，「自信を持って英語を使用できる生徒」，「聞き手を意識しながら発表できる生徒」の育成を目指した。ここでの「聞き手を意識する」とは，自分の持っている紹介する地域に関する情報量と聞き手の情報量に差があり，相手の立場になって発表内容を工夫することを指す。例えば，「抹茶」を日本文化についてよく知らない観光客に対して紹介する際，そのまま「macha」と言うのではなく，「Japanese green tea」といったような聞き手が内容を受け取りやすい説明を付け加えていれば，ある程度「聞き手を意識している」と言える。

生徒４人で１グループを作り，「福井県を楽しむツアー」を考え，プレゼンテーション形式で発表した。ツアー内容を考える際，以下の４項目を内容に含めるように指示した。

・Tourist site（どの場所・市町村を巡るのか）
・Experience（どんな体験やアトラクションができるのか）

・Food（有名な食べ物は何か）

・Souvenir （お土産はどんなものがあるか）

これらは評価基準ではなく，発表のフォーマットである。ツアーを考えるとなると何を言えばいいかわからないチームや行程だけを発表して終わるチームがあると予想したため，全体で統一を図り，内容を考える際の手立てとして上記４つの項目を設けた。

評価基準（合計一人当たり最大３０点）

|  |  |  |
| --- | --- | --- |
| 評価項目 | 評価内容 | 配点 |
| 1. Contents | プレセンの内容，構成の正確さ，面白さ | ５・４・３・２・１ |
| 2. Delivery | プレゼンの仕方，分かりやすさ，表現力 | ５・４・３・２・１ |
| 3. English | 発音，英語の明瞭さ流暢さ，使用語彙，英語運用力 | ５・４・３・２・１ |
| 4. Visual aids | PPTは見やすく，効果的に使用されているか | ５・４・３・２・１ |
| 5. Attitude | 積極的な態度で臨んでいるか，表情や態度 | ５・４・３・２・１ |

　　＋Teamwork：プレゼンテーションの流れの中で，メンバー同士が協力しているか。（＋最大５点）

本実践では，「聞き手を意識する」という視点を取り入れているため，「Delivery」や「Visual aids」という要素を評価基準に盛り込んだ。また，「Contents」の評価に関しては，発表者と聞き手文化知識の差異を意識しながら，伝わりやすい内容であったかどうかという視点から行った。

パフォーマンスの評価は以下の表のように，５つの観点（個人評価）＋１観点（チーム評価）を設けた。ＡＬＴが評価を行った。ALTが日本での経験が豊富ということもあり，母音を多く含んだ日本語らしい発音の場合でも，「５」や「４」がつく生徒が多かったため，発音に関しては外部試験に比べ，評価は甘い。また，Teamworkに関しては，スキットや劇を取り入れて発表しているチームには点数が入るように基準を教員側で設定した。

4 （パフォーマンステストに向けた手立て）

　　　プレゼンテーション形式のパフォーマンステストは何人かの生徒にとってはハードルが高

い活動である。生徒が自信をもって発表できるようになるために，授業でいくつかの手立てを

施した。

　　　１．帯活動としてのペアワーク

１学期の毎回の授業の導入では，ペアを組み英語でスモールトークを行い，英語を話す機会を設けた。２人１組でペアを作り，お題に関する質問だけをする役割とその質問に答え続ける役割を設け，スモールトークを行った。その際，「アイコンタクト」や「ジェスチャー」を「基本発表スキル」として導入し，それらを意識しながら話すように指導した。パフォーマンステストに向けた「発表スキルを磨く練習」という位置づけを意識した。様々なトピックをペアワークで扱ったが，“What did you do last weekend?”といった日常に深く関わる内容であれば，「アイコンタクト」や「ジェスチャー」をすぐに意識できていた。しかし，慣れていないトピックの場合，初回から「アイコンタクト」や「ジェスチャー」を意識することは難しいことが分かった。そこで，ペアを変えながら同じトピックについて複数回繰り返し話すことで，流暢性を高めつつ，「発表スキル」の定着を練った。

また，日本文化に関わるものを英語で説明するというゲーム形式のペア活動も取り入れた。ペアの片方に説明するものを示し，もう一方の生徒は説明を聞いてお題を推測するというゲームを行った。これは，パフォーマンステストで生徒が地域の伝統文化などを紹介することを想定して取り入れた活動である。生徒は楽しみながら取り組んでいたが，主語や抜け落ちて説明していたり，効果音だけを用いて説明していたりする場面があったので，ペアワーク後にフィードバックを行い，主語や述語動詞を意識させることや，パフォーマンステストに使える語彙をインプットさせることを意識した。

２．ＡＬＴの授業

本校では週に１回ＡＬＴの授業を取り入れている。1学期のＡＬＴの授業では，ＡＬＴの自己紹介も含め，プレゼンテーションを行う際や視覚資料の作成の際に気をつけるべきことを指導した。生徒の視覚資料や原稿作成はなるべくＡＬＴの授業で行うように計画し，生徒が言いたい表現をどう英語で表現するのかをＡＬＴに質問する機会を設けることで，表現力を伸ばすためのサポートを充実させた。また，本実践では，「聞き手を意識する」という点にも焦点を当てたため，ALTが原稿をチェックする際，日本文化に関するものに説明が必要最低限入っているかどうかをチェックした。これにより，生徒の表現力が豊かになっただけでなく，語彙知識の伸長が見受けられた場面もあった。例えば，「（お祭りの）屋台」をそのまま「Yatai」と書く生徒がいたが，ALTのフィードバックを受け，「stall」という表現を知り，表現力を伸ばした生徒もいた。

３．教科書内容に関する意見の発表活動

本実践は教科書（Pro-VisionⅠ）の Lesson 5 The Story of Chocolate: Dark and Lightを一通り終えた後の実践であった。学習単元では，チョコレートに関する光と闇の部分をAlthough…やIt is true that …but ~.といった逆説（譲歩）表現で描写していた。これらの表現を定着させ，パフォーマンステストでもより豊かな表現ができることを目指して，意見の発表活動を取り入れた。与えられた教科書に関するテーマについて逆接（譲歩）表現を使いながら意見を発表する活動を行い，さらなる表現の定着を図った。その際，「発表スキル」（アイコンタクトやジェスチャー）を意識することを声かけで指導した。

　　5（成果と課題）

　　（成果）

　　・馴染みのある形式のパフォーマンステストであったため，生徒は安心して取り組みやすかった。

・少し英語に不安がある生徒でもグループメンバーの助けを借りながら発表することができた。

・パワーポイントを使用しながらの発表であったため，聴き手にも伝わりやすい形式であった。

・４つの項目を４人１グループで発表させることで，一人一人の発話量が確保できた。

　　（課題）

　・地元・地域のことを内容で扱ったため，すでに聴衆が知っている内容が多かった。

・評価基準に明確さが欠けている。

（英語運用力という内容が具体的にどんな力を指すのかが分かりにくい）

・評価基準が多く，教員間で評価のブレが出やすい。

・スライド作りに時間をかけてしまった生徒が多く，発話内容をじっくり考える時間が減っていた。

（3）実践を終えて

本実践をTEFL委員会にて報告した際，以下のようなフィードバックを先生方からいただいた。

　　・もしパフォーマンステストの評価が学期の成績に加味されるのであれば，何回もチャンスを設けた方がよい。

　　・「なぜこの場所をツアーの場所として選んだのか。」といった発表内容と発表者の関連性を持たせ

ると豊かな表現が生まれるのではないか。

　　・Show and Tellのように，視覚資料づくりに時間をかけない方法でパフォーマンステストを行うべきではないか。１年生にとって，PowerPointでの資料づくりはどうしても時間がかかってしまう傾向がある。

　　・グループの評価をそのまま個人評価として扱ってもよいのではないか。

 　　 授業者としての一番の反省点は，生徒が「知りたい！」，「伝えたい！」という思いを抱くような手立てが欠けていたという点である。安心して取り組むことができる内容であった半面，「福井県」のことを話す動機づけが弱かった。教科書内容とも離れていたため，パフォーマンステストの位置づけをより明確にすべきであった。

　　　自分で教科書の語彙を選んでプレゼンテーションに取り入れている生徒もいた。生徒にとって教科書の存在は大きく，英語学習の拠り所となっている一面もあるため，今後パフォーマンステストを行う場合は，教科書をうまく土台として利用していきたい。

【改善例】

　　授業者としての実践に対する反省や先生方からのご助言を基に，教科書を土台としてパフォーマンステストを実践するため，以下のように提案する。

　　学年：１年生　実施時期：３学期

　　実施単元；Pro-VisionⅠ　Lesson 5 The Story of Chocolate: Dark and Light

　　形式：プレゼンテーション

 概要：Pro-VisionⅠのLesson 5 はチョコレートが生まれた歴史に焦点が当てている。そこで生徒は嶺南地区の特産品やその歴史をＡＬＴに紹介する。以下のような内容を盛り込むように指示する。

・紹介する特産品の基本情報（値段，材料，販売店など）

・特産品に関する歴史や発祥についての説明

　　・視覚資料はスライド３枚程度

評価基準

|  |  |
| --- | --- |
| 評価基準 | 得点 |
| Purpose （なぜその特産品を選んだのかという選定理由がはっきりと述べられているか。） | ３・２・１ |
| Simple English（シンプルで分かりやすい英語を使って説明しているか） | ３・２・１ |
| Visual aids（見やすい資格資料を用いて説明しているか） | ３・２・１ |

改善のポイント

・教科書内容に関連した内容でプレゼンテーションを行うことで，教科書での語彙を身につけることをねらう。

・評価基準を絞り，教員の評価の負担の軽減を狙った。英語のシンプルさを基準に入れることである程度抽象的な内容を他者にわかりやすく伝えるプレゼンになるように指導したい。

**外部試験スピーキングテスト学習会より**

2020年11月20日実施

講師：ベネッセコーポレーション　　「GTEC」編集チーム

参加者：TEFL委員　　三仙，本田，大橋，辻

**これまでの委員会での活動より**

昨年度からスピーキングのパフォーマンステストの在り方について研究している。委員会での様々な活動を通して，スピーキングをパフォーマンステストとして扱う際の難しい点として次の３点が明らかになってきた。

①即時評価の難しさ

生徒のパフォーマンスはライティングの様にその場に残らないため，残したい場合は，レコーディングが必要になる。③の点とも重なるが，教員側の時間的な労力との兼ね合いが難しい。また，即時評価する場合，短い時間の中で，生徒のパフォーマンスに対して妥当な評価とは何なのかがわからない。

②評価者の目線合わせ

現場では評価者がALTとJTEとなる場合が多いと考えられる。（またはJTE同士）ルルーブリックなどにより，評価基準をシェアするようにしているが，それでもずれが起きやすい。（多くの場合，ALTが甘めに採点し，JTEが辛めの採点となる。）複数で同様に評価をするには，お互いの目線合わせが必要だが，その方法はどのように行えばよいのか。

③時間的な難しさ

スピーキングパフォーマンステストの準備・実施にはそれなりの時間がかかる。また，ワークシートや生徒へのルーブリックの事前提示，実施当日の時間割や教室の変更など場合によっては大掛かりになることがある。それに伴い，①でも述べた，レコーディングによる評価などを踏まえると，費やす時間は大きい。パフォーマンステストの必要性については，昨年度の研究でも少し言及し，委員の中でも必要性を感じることは出来ているが

どうにかして現場の先生方の時間を効率的に使用する方法はないものかと考えている。

**学習会を開くことになった経緯**

委員会ででてきたこのような難しい点は，外部試験のスピーキングでも同様のことが課題となっているはずだ。外部試験としてスピーキングの採点を行っている団体が，どのように評価をし，公平な評価をするための準備を行っているのかを知ることで，学校現場でも活用できる内容があると考え，福井県の多くの高等学校でも実施されており，今年度は注が校でも採用されるようになったGTECの編集チームの方々にオンラインでお話を伺った。

まずは，GTEC（主にスピーキング試験）の概要について説明する。

**GTECテストの根幹**

学習指導要領に基づき，①リアルな英語使用場面＋②タスクベースの課題解決＋③CEFRのCan-Doをベースとしている。

**スピーキング試験の構成**

|  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- |
|  | 準備時間 | 回答時間 | 内容 |
| Part A | 各30秒 | 各40秒 | 音読。英文を読み上げる。 |
| Part B | 各10秒 | 各15秒 | 質問を聞いて応答する。図示された情報を読み取り，それに関する質問を聞き取り，応答する。 |
| Part C | 30秒 | 60秒 | ストーリーを英語で話す。日常的な出来事について，話の流れを踏まえて状況説明する。 |
| Part D | 60秒 | 60秒 | 自分の意見を述べる。身近で社会的なテーマに対して，自分の意見とその意見をサポートする理由を述べる。 |

**GTEC　スピーキングテスト採点基準**

≪Goal Achievementについて≫

GTECの各問題の評価にはAchievement　Goalというものが「GTECテストの根幹」に基づき設定されている。これを基に各パートで段階評価を行う。

次の例題を用いて説明する。

例題（Part B）

あなたは留学先で，友達と週末の予定について話しています。友達から２つ質問されますので，画面上の予定表をもとに，質問に英語で答えてください。

読まれる英文：What are you going to do this Saturday?

この例題では，Goal Achievementの観点で２段階評価となる。つまり，１（点）or０（点）。

１（点）になる評価基準は，

・Test taker communicates the information and/or message required to complete the task.

解答例：I’m going to go to my grandparents’ house and to the gym.

0(点)になる評価基準は，

・Test taker fails to communicate the information and/or message required to complete the task.

・No attempt: silence or no English spoken.

・Response cannot be rated: inaudible, test taker speaks too softly to evaluate, or unable to distinguish words being said.

・Test taker response completely unrelated to the task or topic presented.

解答例：I’m going to go to my grandparents’ house.

与えられたタスクを達成できているかが観点になっているため，土曜日にすることを全てを共有できている解答が１となり，それ以外は０となる。

≪語彙・文法について≫

例題（Part D）

あなたは英語の授業で，次のテーマについて発表することになりました。自分の考えを述べ，その理由を詳しく具体的に説明してください。聞いている人に伝わるように話してください。

Schools shouldn’t allow students to use their cell phones while at school. What do you think about this? State your opinion and give at least one reason with an example or explanation.

解答例１（２点）　I don’t agree with idea. Cell phone useful in class. … Students can search difficult words they don’t understand class. So, it… it was good for study.

解答例２(3点) I think schools shouldn’t allow students to use their cell phones while at school. School is the place for study. It’s difficult to study if they use cell phones. For example, they want to check messages during class. They don’t listen to the teacher. So, students get bad grades.

解答例１に比べると，解答例２は，文法や語法の表現の幅が広いことが分かる（例題中の色付きの部分）。この例のように明らかな場合は採点しやすいが，中には2点か３点の区別がつきにくい解答も存在する。そのような場合は，次に説明するキャリブレーションでの目線合わせが効果的に機能している。

**目線の合わせ方について**

GTECスピーキングは，10名程度のチームで採点を行っており，評価基準の目線合わせのために，キャリブレーションを行っている。キャリブレーションとは，同一の問題に対して，GTECの評価基準をもとに，５～６人が素点１～４に当てはめて各自が採点を行う。その後，採点を集約し，一致したかどうかをぶつける。一致率が中くらいであったものについて，チームでディスカッションを行い，なぜその判断をしたのかを言語化してく。わからない場合はCEFRの専門家に話を聞くなどして解決していく。

また，年間に解答サンプル集を作り，キャリブレーションや採点時にこれに立ち返りその採点が妥当かを確認する。（凡例のデータベース化）

**学習会を経て**

　評価の平等性を保ち，誰が評価しても同じ評価になるようにするには，教員間の目線合わせが不可欠なこと，キャリブレーションやデータベース化により，個人やチームでの凡例を増やしていくことが必要だとわかった。ただ，学校現場としてできる部分には時間的制約か難しいと感じる部分もあるが，評価をより適正なものとするためには，このようなキャリブレーションのような取り組みは何らかの形で取り入れていかなければならない。

今回の学習会で得たことを参考に，学校現場で出来る評価のカタチについてさらに考えていく必要があると感じた。また，GTEC担当者の方の言葉の中で，「先生方は，日頃のご指導で生徒の姿を知っているため，彼らのパフォーマンスに天使の輪をかけて評価を行っている。」と仰っていたことが印象に残っている。学習指導要領の意欲や態度にあたる生徒の成長をどのようにパフォーマンステストの中で評価するかは，学校現場独自の観点であろう。この点も含めて，スピーキングの評価について更に委員各自が文献から学んだことや授業での実践を共有することを交えて研究を深めていきたい。